

昭和 38 年を顧みて

出口 孝 吉

昭和 38 年は災害の年であった。年初から豪雪に見舞われ、次いで長雨、集中豪雨、冷害と農業関係には天災が続いた。幸い家畜関係は直接の被害は比較的少なかったが、豪雨や長雨による作物の減収は、手持飼料の欠乏を生じ、最近の輸入飼料の値上がり

と相まって、畜産経営に深刻な影響を及ぼしている。酪農については乳価交渉が最大の関心事であった。4 月からの乳価は農林大臣の談話等もあって解決したが、10 月以降の分については、生産者側、メーカー共に譲らず未解決のままである。開放経済下における日本の酪農経営を確立する上において乳価の問題は極めて重要であるので、早期解決を望みたい。なお蒜山においては県営の乳牛育成場から預託育成を開始したが、ジャージー導入 10 周年を迎えた年でもあり、ジャージー乳牛について認識を新たにさせた事は意義が深い。

和牛については、従来の役肉用牛から新たに肉用牛として再出発することになったが、肉利用を重視した新しい牛の見方についての全国的な研修会が開かれた。また東北地方に対する和牛の販路拡張も行われたが、牛価が依然低迷している時期だけに今後

も考えるべきであろう。食肉については競馬益金の助成を得て冷凍車を購入し、枝肉の県外出荷をはかることになった。既に大阪には出荷され岡山肉として名声を博した。また畜連の食肉処理場の新設によって、食肉の農村還元が行われ、流通の改善を消費拡大に貢献することになった。

養鶏については、岡山県養鶏協会が設立され、総

合的な養鶏の振興、指導に当ることになった。養鶏は今まで自力で発展して来た傾向があるが、各業界の力の結集が弱かった嫌いがある。協会の活動によって近代的な養鶏の推進ができるものと期待したい。なお本年はアメリカヒナの輸入が活発で既に 5 万羽以上のヒナが県内に導入されている。これに対して育種の規模の拡大と、改善組織の整備の必要性が痛感される。

最後に本年は畜産団体（連合会）に問題の多かった年であるが、将来の発展のために、雨降って地固まることになれば幸である。